参考資料１

サード・ステージ・プラン（素案）の

参考資料

資料一覧

1　学研都市の理念について　・・・１
　　別添　未来を拓く知の創造都市について　・・・３

２　「共生のための科学」について　・・・５

３　魅力的な街づくりの概念図　・・・７

４　クラスターと主要な駅の位置　・・・８

５　クラスターの整備状況　・・・９

６　道路の早期整備について　・・・10

学研都市の理念について

「考え方」

①「学研都市の理念」は、長期にわたる学研都市の建設の基本的な考え方を示すもの。したがって奥田懇談会から続く理念（考え）の流れを継承したものとする。

②サード・ステージ・プランにおいて学研都市の理念の実現に向けて特に重視すべき点を「サード・ステージ・プランでの視点」として整理。

⇩ （学研都市の理念として以下の三点に集約）

（１）文化学術研究の新たな展開の拠点づくり

近畿圏において培われてきた豊かな文化学術研究の蓄積をいかし、歴史、文化、自然環境に恵まれた京阪奈丘陵において、創造的かつ、国際的、学際的、業際的な文化学術研究の新たな展開の拠点づくりを目指す。

（２）世界及び我が国の文化学術研究の発展、国民経済の発達への寄与

新しい近畿の創生に貢献することはもとより、世界及び我が国の文化学術研究の発展並びに国民経済の発達へ寄与する。

（３）未来を拓く知の創造都市の形成

文化学術研究の諸活動の成果を取り入れ、地球環境への負荷が低く、新たな試みが積極的に展開され、市民や研究者が持てる力を最大限に発揮し、確かな未来へ先導していく都市の形成を目指す。

「解説」

（１）、（２）については以下の奥田懇談会からの流れで整理。

（３）については別添資料『未来を拓く知の創造都市』を参照。

１）関西文化学術研究都市建設促進法（昭和 62 年）

「文化、学術及び研究の中心となるべき都市を建設し、もって我が国及び世界の文化等の発展並びに国民経済の発達に資することを目的とする。」

２）「建設に関する基本方針」（昭和 62 年、平成 11 年改訂）

①文化・学術・研究の新たな展開の拠点づくり

創造的かつ国際的、学際的、業際的な文化学術研究の新たな展開の拠点作りを目指すもの。

②世界の文化・学術・研究都市の発展、国民経済の発展に寄与

近畿の創生に貢献することはもとより、わが国および世界の文化･学術･研究の発展ならびに国民経済の発展に寄与。

３）「セカンドステージプラン」（平成８年）

①文化の創造と交流

わが国全体の文化力の向上を先導する文化創造の中枢の形成

日本固有の文化と世界の異なる文化との交流による文化の国際貢献

②新しい学術研究の推進

人類的課題の解決に貢献する学術研究の推進

（参考）　理念の整理

○都市建設の意義と役割
（昭和５３年「奥田懇談会第１次提言」）
①科学・技術の新領域の研究開発の促進
②新しい文明のあり方の探求とその方向に沿った研究開発

↓

○都市建設の意義
（昭和６２年「建設に関する基本方針」）
・文化学術研究の新たな展開の拠点づくり
・世界及び我が国の文化学術研究の発展、
国民経済の発達への寄与

↓

○学研都市の理念（平成８年「セカンドステージプラン」）
・文化の創造と交流
・新しい学術研究の推進
・２１世紀のパイロットモデル都市の建設

← **○基本的視点（都市建設の理念）**
（平成１１年「建設に関する基本方針」改訂）
・文化の創造と交流
・新しい学術研究の推進。
・２１世紀のパイロットモデル都市の建設

↓

○都市建設の意義（平成１１年「建設に関する基本方針」改訂）
・文化学術研究の新たな展開の拠点づくり
・世界及び我が国の文化学術研究の発展、国民経済の発達への寄与。

別添

未来を拓く知の創造都市について

○　サード・ステージ・プランでは、当初よりの都市建設の理念を継承しつつ、居住者・立地機関が確実に増えていく中で、より都市生活・都市住民に焦点をあてた考え方で整理。

○　以下の３つの視点を包括した概念とする。

「パイロットモデル都市」
「多彩で魅力的な創造都市」
「サスティナブルシティ」

⇩

未来を拓く知の創造都市を推進

○「知の創造都市」とは、従来のパイロットモデル都市、及びサスティナブルシティ、創造都市を総括する概念。

※「創造」とは「新たに造ること。新しいものを造りはじめること」（広辞苑）。特に今後は創造都市として、都市が直面する諸問題に対し、創造的解決が行えるような「創造の場」を形成することが必要。

※「知」とは、豊かな自然環境、居住環境、研究環境の中で、知識や知性が豊かであることの意。（＝知的な）

○またサスティナブルなまちづくりの視点に立って、高密度による、効果的な公共交通とエネルギーの供給、ヒューマンスケールの開発、複合機能の促進などを図ることが必要。そこで「未来を拓く」と修飾し、学研都市周辺の自然、歴史資源や多様な市民活動、市民と研究者の交流・連携などから、学研都市ならではの明るい将来、ライフスタイルを創造するとの意味を加える。

以上より学研都市はこれらの概念を踏まえて**未来を拓く知の創造都市**とする。

（参考）

○　パイロットモデル都市

○奥田懇談会第３次提言（昭和 55 年 5 月）

学研都市における住宅、都市施設全体の建設に対してパイロットモデル都市として位置付け

・学術研究活動の集積と一体化したモデル都市の建設、先導的試行を提案（パイロットモデル都市構想）

・２１世紀を想定した願望的なビジョン

・今日都市が抱えている切実な問題、今後予想される諸問題を解明するなどの試行モデル

○セカンドステージプラン（平成 8 年 4 月）「２１世紀のパイロットモデル都市の建設」

・２１世紀にふさわしい新しい試みに積極的に取り組み、今後の都市のあり方を提示する先導的な都市の実現を目指す。また街づくりの諸課題の解決に貢献

・自律的都市形成に努めるとともに、併せて、国際化、高度情報化、高齢化への対応、環境の保全、良好なコミュニティの形成等パイロットモデル都市としての街づくりに努める。

○　多彩で魅力的な創造都市

「関西文化学術研究都市の明日を考える懇談会」では、学研都市を「多彩で魅力的な創造都市」として位置付け。

創造都市とは市民の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備え、グローバルな環境問題や、あるいはローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような『創造の場』に富んだ都市である。【参考文献：佐々木雅幸（大阪市立大学院教授）『創造都市への挑戦』】

○　サスティナブルシティ

より、高密度による、効果的な公共交通とエネルギーの供給、ヒューマンスケールの開発、インナーエリアや計画的な新市街地開発における移動の必要性を減少させるために、複合機能を促進させること、徒歩・自転車や公共交通の促進。

参考文献：オールボー憲章（1994　第一回サスティナブルシティ会議で採択）における土地利用パターン、交通パターン

１）正義の都市：食物、教育、保健、希望がフェアに配分される。

２）美の都市：芸術、建築、景観がイメージをかきたて精神を高める。

３）創造的な都市：開かれた心と経験が人的資源のポテンシャルを高めて変化にすばやく反応できる。

４）エコロジカルな都市：生態への影響を最小限にし、景観と市街地形態がバランスし、建物とインフラが安全で資源が効率的に使われる。

５）到達のしやすさと移動性が高い都市：フェイス・ツー・フェイスでも通信手段でも情報がやりとりしやすい。

６）コンパクトで多中心（ポリセントリック）な都市：農村地域を保全し、近隣コミュニティが結ばれ、交流が高められる。

７）多様な都市：幅の広い重層的な活動が活力を生み、活気のある市民生活を促す。

参考文献：リチャード・ロジャース（英国建築家）『サスティナブルシティの特性（「小さな衛星都市のための都市」（1998））』

「共生のための科学」について
（サスティナビリティ・サイエンス）

１．「共生のための科学」の推進

（１）学研都市における取り組みの意義等

① 学研都市では、建設当初より「日本の未来、ひいては人類の未来に係わる研究に長期的視点で取り組む」または、「人類的課題の解決に向け、人文・社会科学と自然科学とが連携した総合的な学術研究の一層の推進を図る」ことを明記。
また、「我が国及び世界の文化等の発展並びに国民経済の発達に資すること」を目的に建設を推進。（関西文化学術研究都市建設促進法　第１条）

② (財)国際高等研究所や(財)地球環境産業技術研究所等、世界的な研究機関が立地し、また我が国を代表する大学、研究機関が多数立地しており、我が国でも類をみない多様な知の集積。

③ 学術研究都市の周辺部には、多くの人文・社会科学系の大学、研究機関が立地しており、特に今後、最も重要なテーマとなる環境問題、食糧問題およびエネルギー問題等の課題解決に向けて、人文・社会科学系と自然科学が融合した総合科学として学術研究を強力に推進し、我が国ばかりでなく世界に向けて発信し、貢献することが可能。

④ 平成17年度に実施したアンケート調査では、学研都市内及び周辺機関において、28機関が「サスティナビリティ・サイエンス」について取り組んでいるところ。

（２）学研都市において取り組むべき分野

すでに取り組みがはじめられている分野、そして学研都市および周辺都市のポテンシャルを活かし、今後、学研都市内で優先的に取り組むべき分野として、以下の分野が考えられる。

地球科学・自然環境・食料・農業・生命科学・人文社会科学の分野

２．推進体制に向けた今後の方向

① 「共生のための科学」の推進に向けて、学研都市内外の基幹的な大学、研究機関を中心に、「けいはんな　共生のための科学推進会議」ともいうべき学際的な研究交流の場を設けるとともに、新たにこうした分野の学術研究機関の誘致を図っていくことが必要。

② 推進会議では、研究者間の交流連携や共同体制の構築、京都や大阪等の大学研究機関との連携等について検討するとともに、交流会議や学術会議等を開催し、学研都市からの情報発信を図る。

（参考）

（１）過去の経緯

①昭和53年　奥田懇提言（第1次提言、第2次提言）

・学研都市の主たる施設の目的：「日本の未来、ひいては人類の未来に係わる研究に長期的視点で取り組む」ことと明記

・「４つの理由」と「８つの研究機構」

（４つの理由）

1. 人類の生存条件の確保に応える研究機構	2. 望ましい社会像の構築に応える研究機構
3. 新しい産業構造の構築に応える研究機構	4. 日本文化の正しい理解に応える研究機構

（８つの研究機構）

(1) 資源・エネルギーに関する研究機構	(2) 食料問題に関する研究機構
(3) 情報・文化に関する研究機構	(4) 将来産業に関する研究機構
(5) 人間科学に関する研究機構	(6) 将来都市に関する研究機構
(7) 南北問題に関する研究機構	(8) 日本文化に関する研究機構

②平成8年　セカンドステージプラン答申

・人類的課題解決に貢献する学術研究の推進として、「人類的課題の解決に向け、人文・社会科学と自然科学とが連携した総合的な学術研究の一層の推進を図る」ことを明示

③平成17年　明日懇提言

・「持続可能な社会の実現に向け、環境・食糧・エネルギーなど自然科学と人文社会科学とが融合した総合科学に対する学術研究を強力に推進し、積極的に社会貢献を果たすことが重要」

（２）現在の取り組み分野

・アンケート調査結果では、取り組みの分野は、「工学」（17機関）が最も多く、次いで「社会科学」（9機関）、「理学」（8機関）の順となっている。学研都市内および周辺機関における主な取り組み分野は下表の通りである。

・また、奈良女子大学で「自然科学・環境科学」「食料・農業」そして「社会科学」の分野横断的な取り組みがはじめられており、今後、学研都市の多様な知の集積を活かした取り組みの推進のポテンシャルが高まっている。

自然科学・環境科学	CO2メカニズム、バイオマス等の環境科学（地球環境産業技術研究機構）
	環境保全、環境負荷軽減の物質開発の基礎研究（国際高等研究所）
生態系保全、自然との共生	生物・植生調査、農山村活性化事業（奈良女子大学）
食料・農業 生命科学（バイオなど）	遺伝子システム、神経科学等（奈良先端科学技術大学院大学）、グリーンケミストリー（奈良女子大学）
その他 （人文・社会科学等）	産業、技術、社会のマネジメントモデル（大阪大学）、持続可能性に関する制度・評価に関する研究（大阪大学）

未来を拓く知の創造都市 （概念図）

＜豊かで多様な自然・緑＞

・生駒山系、木津川などの雄大な自然環境、
クラスター周辺の里山や農地

＜良好な住まい・街並みの形成＞

・良好な住宅と街並みのストック
・環境に優しい住宅の整備など新たな郊外居住の取り組み

○地球環境への負荷の小さい都市の形成
○外国人居住者に向けた都市環境整備
○学研都市らしい景観の形成
○ゆとりある、豊かなライフスタイルの実現

＜自然環境の保全・市民活動の展開＞

・様々な知的交流イベントの開催
・盛んな市民活動

○自然環境の保全・緑とのふれあい
・クラスター開発により、生態への影響を最小限化
・里山などの自然環境の保全、活用
・市民農園の活用
・歴史文化とのふれあい
○知的文化学術交流の推進
・市民大学、市民講座、立地機関の連携による多彩なイベントの開催

＜先端科学・学術研究の展開の場＞

【市民・研究者・立地機関等】

＜生活の利便性・交通環境の向上＞

・京都・奈良・大阪の３都心まで 30 分
・身近な商業施設や公共公益施設の集積
・子育て世帯から高齢世帯まで対応した公共公益サービス

○クラスターを中心とした都市形成
・中心クラスター：学研都市全体の都市運営、情報発信、市民交流等の機能充実
・各クラスター：地区センターとして生活支援施設、市民交流施設等の充実
・エントランスゾーン：商業施設等による生活サービス機能の充実
○高齢者や環境に配慮した交通の取組み
・コミュニティバスの再編などによるバス路線の充実
・環境に優しい交通の導入検討
・自転車の利用促進

＜学研都市におけるフィールドの多様な展開＞

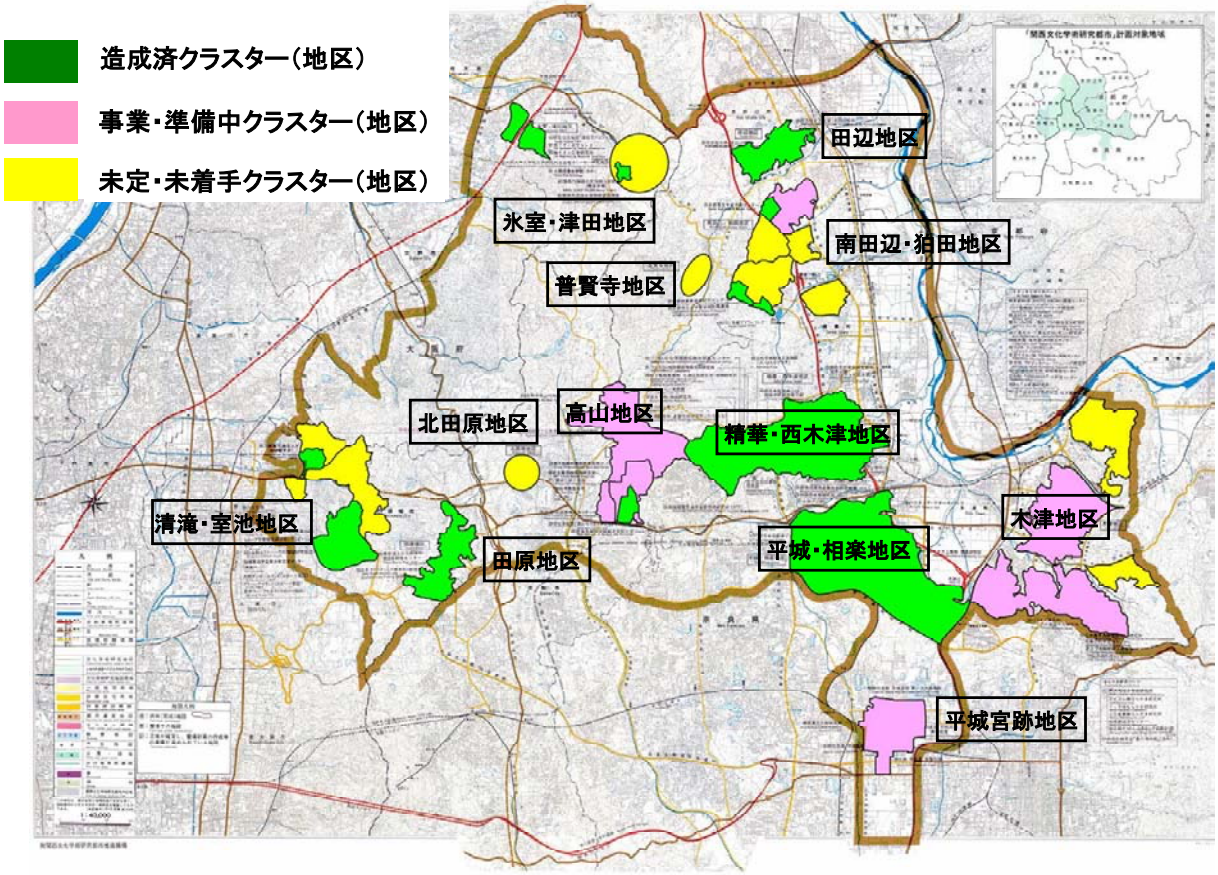
○時代をひらく実証実験
○「体験し学ぶ新たな観光」の推進

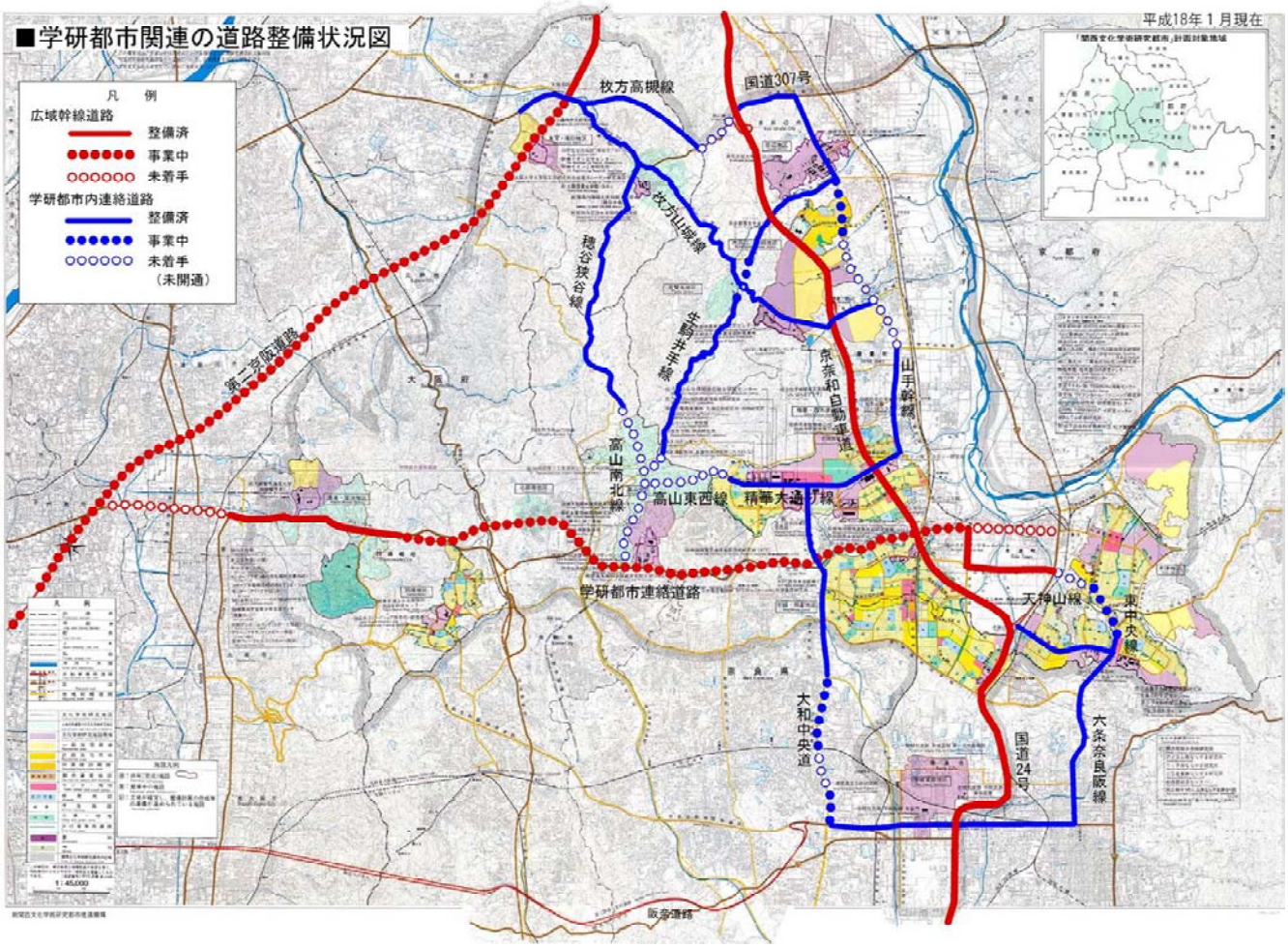
＜日本を代表する豊富な歴史・文化＞

・1300 年の歴史を有する奈良や京都の多様な文化財に囲まれ、歴史文化の香る地域

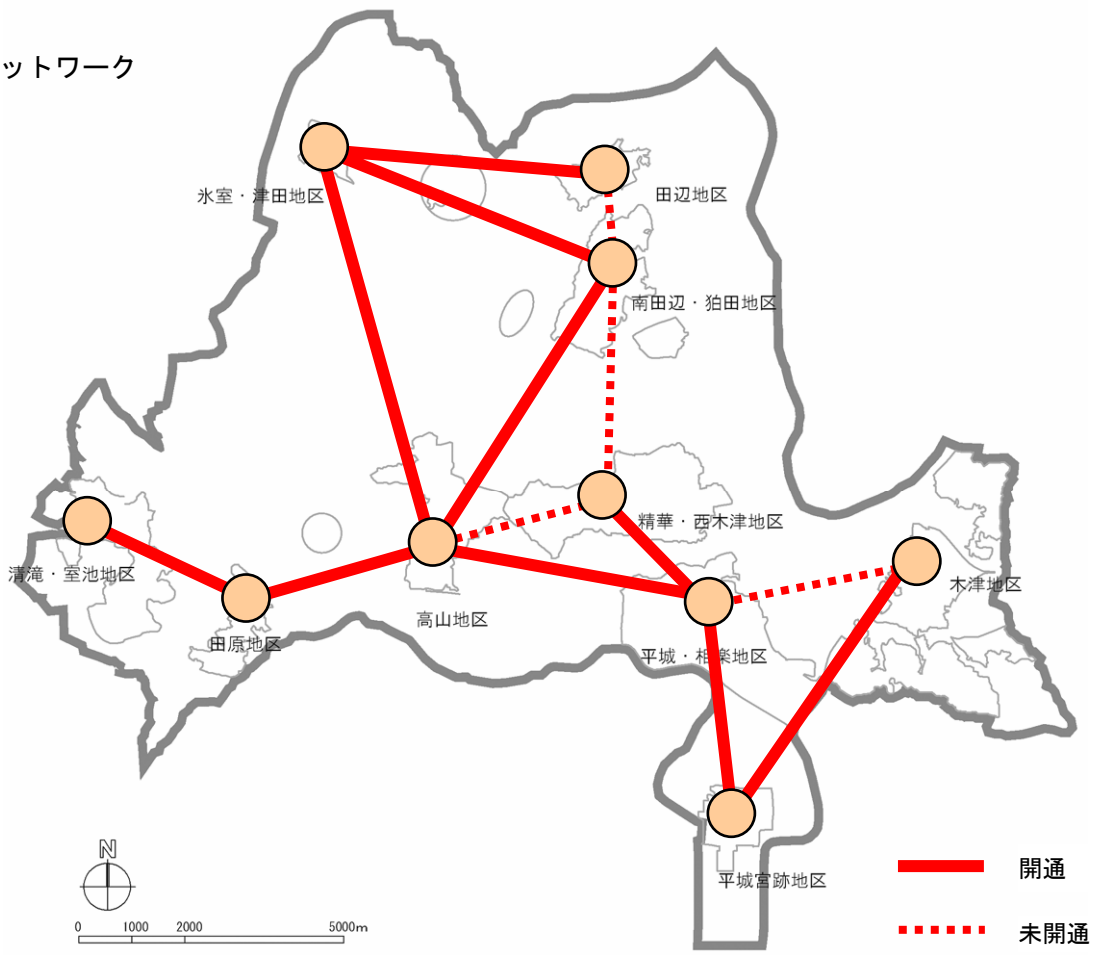
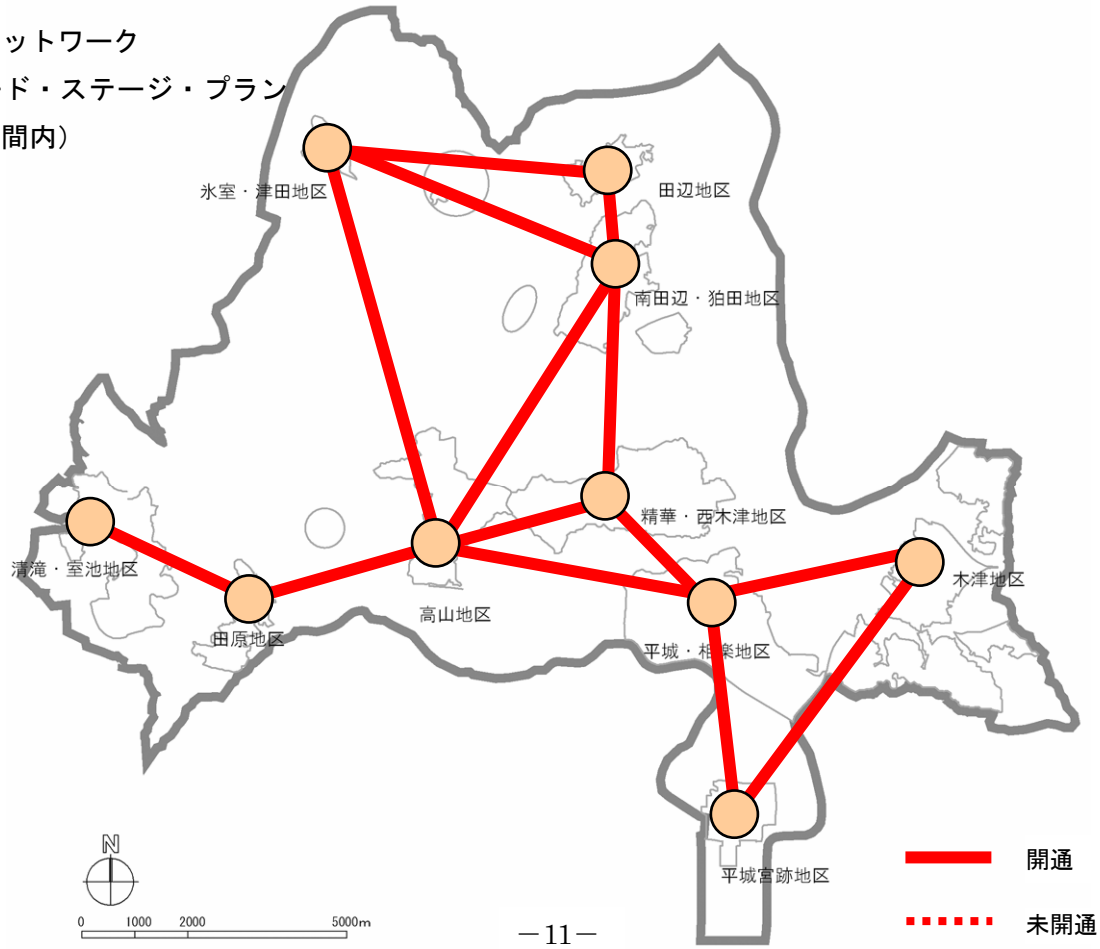
クラスターと主要な駅の位置

クラスターの整備状況


造成済クラスター（地区）
事業・準備中クラスター（地区）
未定・未着手クラスター（地区）
田辺地区
氷室・津田地区
南田辺・狛田地区
普賢寺地区
北田原地区
高山地区
精華・西木津地区
清滝・室池地区
田原地区
平城・相楽地区
木津地区
平城宮跡地区


■学研都市関連の道路整備状況図
平成18年１月現在
凡　例
広域幹線道路
整備済
事業中
未着手
学研都市内連絡道路
整備済
事業中
未着手
（未開通）
枚方高槻線
国道307号
枚方山城線
穂谷狭谷線
生駒平尾線
京奈和自動車道
山手幹線
第二京阪道路
高山南北線
高山東西線
精華大通り線
学研都市連絡道路
天神山線
東中央線
大和中央道
国道24号
六条奈良阪線
阪急電鉄

現況ネットワーク



将来ネットワーク
（サード・ステージ・プラン
の期間内）